

価値観の因子構造：比較文化的考察

安藤，延男
九州大学教養部：助教授

<https://doi.org/10.15017/6795098>

出版情報：言語科学. 8, pp. 53-66, 1972-03-29. 九州大学教養部言語研究会
バージョン：
権利関係：



価値観の因子構造*

—— 比較文化的考察 ——

安 藤 延 男

Morris & Jones (1955) ならびに Morris (1956) は、自らが構成した「生き方」(“Ways to live”) 尺度を用いて 各国学生を対象とした広範な調査を行い、価値パターン (value patterns) の比較文化的研究と価値観の社会的・心理学的・生物学的規定因の分析について報告しているが、さらに方法論的な考察の一つとして、アメリカ、インド、中国の各国学生資料について、それぞれ独立に因子分析を実施し、その結果の比較を通じて、価値次元にかなりの共通性が存在することを見出したと主張している。

こうした Morris らの主張は、彼らの用いる因子尺度得点の算出法にも直接関連してくるものである。すなわち、特定の因子尺度の得点は、各国の13個の Way の尺度値 (scale value; これは Edwards & Thurstone [1952] による系列間隔法の適用により求められた等間隔尺度値である) の行列と、対応するアメリカ学生の因子負荷量 (文化間に共通性が存在するので、アメリカのそれをもって代表させてよいと Morris は考えている) の積の総和を、各因子毎に求めることにより得られるとしている。たしかに、Morris の報告したアメリカ、インド、中国の3つの文化標本の因子構造をみるかぎり、小異はあるものの、概して価値次元の共通性を認めるのにさほど無理はないように思われる。

しかるに、その後 Prothro (1958) は、アラブ学生の資料にもとづく因子分析を行っているが、見出された5つの因子のうち3つだけが、Morris によるアメリカならびに中国学生の因子と対応しているのみで (すなわち Morris の因子 A, B, E に対応する)、他の2つの因子はアラブ学生にのみ特有な価値次元 (“*Dynamic Integration*” と “*Simplicity and Moderation*”) であると考察し、文化を超える価値次元の共通性を主張した Morris らの主張に疑義を述べている。

こうした事情に鑑み、われわれは、わが国学生の「生き方」尺度の因子構造が、果して Morris らの析出した因子とどのように対応しているかを検討することの必要性を痛感するに至った。従って、本研究の目的は次の諸点を明らかにすることにある。

(1) 日本学生の資料にもとづく因子分析の結果を報告する。

(2) Morris の析出した3つの文化標本の価値因子と対比させることにより、価値次元の文化間共通性の問題を吟味する。あわせて、日本人の価値次元に相対的特異性があるとすれば、それについても考察したい。

(3) 最後に、日本学生にみられた Way 7 への選好が何を意味するかについて考察する。この考察を行うようにわれわれを動機づけたのは、われわれの前研究 (Misumi & Ando, 1964; 安藤・三隅, 1965) を報告した際に、わが国学生にみられた Way 3 から Way 7 への選好の

* 本研究は、文部省科学研究費の援助を受けて行われたものである。なお、本研究の一部は、日本グループダイナミックス学会第15回大会 (1967年)、ならびに日本社会心理学会第8回大会 (1968年) において、三隅・不二教授 (教育学部) との連名で報告した。

時代的変移に対する解釈や評価が、論者によってかなりの喰い違いを示したことである。この点については、考察の際にさらに詳しくのべることとする。

方 法

因子分析の実施*

今回の因子分析は、1964 年度にわれわれが実施した Morris の「生き方」尺度への、九州大学新入学生による回答資料 1366 名（この回答者の学部別分布は、Misumi & Ando の論文 [1964] を参照されたい）から、無作為に抽出した400名の男子学生の資料にもとづいてなされたものである。

Table 1. Brief Contents of Marris' Value Scale of 'Ways To Live'

Way 1:	preserve the best that man has attained
Way 2:	cultivate independence of persons and things
Way 3:	show sympathetic concern for others
Way 4:	experience festivity and solitude in alternation
Way 5:	act and enjoy life through group participation
Way 6:	constantly master changing conditions
Way 7:	integrate action, enjoyment, and contemplation
Way 8:	live with wholesome, carefree enjoyment
Way 9:	wait in quiet receptivity
Way 10:	control the self stoically
Way 11:	meditate on the inner life
Way 12:	chance adventuresome deeds
Way 13:	obey the cosmic purposes

Note: This is cited from Morris (1956, p. 1).

Table 2. Intercorrelations of Thirteen "Ways to Live" for 400 Japanese College Students (Pearson's *r*)

Way	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.	11.	12.	13.
1.		-100	149	-285	213	050	085	104	028	052	-157	030	124
2.			-122	334	-303	-121	-086	046	179	134	265	-088	-173
3.				006	157	-016	068	099	145	065	058	154	317
4.					-154	-021	-068	177	188	-004	222	127	-152
5.						207	102	173	-111	109	-273	174	111
6.							090	012	-076	057	-114	138	039
7.								163	-067	-100	-109	068	151
8.									090	-085	029	061	096
9.										-032	219	-074	099
10.											217	-084	068
11.												-053	-034
12.													092

Note: Decimal points are omitted for all entries.

* 統計的処理は、九州大学中央計数施設の Algol-H を用いて行った。

Table 3-1. Matrix of Centroid Factor-Loadings

Way \ Factor							$h^2_{obt.}$	$h^2_{guess.}$
	I	II	III	IV	V	VI		
1	192	335	-214	-237	-254	-153	339	213
2	100	-569	125	-695	-189	-047	396	334
3	465	151	-275	191	154	-161	401	317
4	235	-437	415	228	084	-165	505	334
5	163	553	134	-100	083	-202	408	222
6	150	203	170	-224	188	126	194	207
7	153	280	112	113	-155	234	206	163
8	380	070	219	092	-220	-041	256	177
9	268	-266	-149	178	-155	-142	240	219
10	131	-201	-225	-303	244	156	284	217
11	180	-524	-154	098	099	053	353	265
12	240	198	222	079	259	-108	231	174
13	350	263	-297	198	045	156	345	317
Σa^2	836	1.576	651	414	408	275	4.159	
$\Sigma a / \Sigma \Sigma a^2$ (%)	20.1	37.9	15.6	10.0	9.8	6.6	100.0	

Note: Decimal points are omitted for all factor-loadings in this Table.

Table 3-2. Matrix of Rotated Factor-Loadings (Orthogonal Solution)

Way \ Factor							$h^2_{obt.}$
	I	II	III	IV	V	VI	
1	-406	274	-084	202	262	000	342
2	484	-146	-076	000	384	-037	410
3	-034	558	000	086	-092	-278	404
4	553	-110	278	092	067	-289	490
5	-428	105	187	391	-154	-120	420
6	-036	027	026	364	-191	156	196
7	-116	170	346	036	-025	208	207
8	049	221	385	198	140	015	278
9	224	300	000	-127	261	-214	270
10	233	140	-410	123	-168	050	288
11	517	144	-197	-153	082	-082	364
12	-107	101	218	279	-253	-164	227
13	-119	558	057	-044	-127	054	350
Σa^2	1.292	.947	.650	.516	.493	.329	4.227
$\Sigma a^2 / \Sigma \Sigma a^2$ (%)	30.6	22.4	15.4	12.2	11.7	7.8	100.1(%)
	10.0	7.3	6.0	4.0	3.8	2.5	32.6

Note: Decimal points are omitted for all factor-loadings in this Table.

まず、各 Way に対する「非常に好き」から「非常にきらい」までの7段階評定値にもとづき、13個の Way 相互間で積率相関係数 (Pearson の r) の行列を求め、これに Thurstone の重因子分析法 (セントロイド解) を適用して、6個のセントロイド因子を抽出することができた。さらに、単純構造をえるために図解法による直交回転を実施し、解釈可能な5個の因子と、1個の残差因子を見出すことができた。相関行列、セイトロイド因子行列、回転後の因子行列をそれぞれ Table 2, Table 3-1 ならびに Table 3-2 に示す。

結 果

Table 2 の相関係数の値は、最高 $r = .334$ であり、概してその値が低いことに気付く。このことは、各「生き方」項目 (以下 Way とよぶ) が、相互に独立した内容で構成されていることを物語るものと解釈される。

次に、Table 3 の回転後の因子構造を考察するに先立ち、各因子の寄与率をみると、因子 I 10.0%、因子 II 7.3%、因子 III 5.0%、因子 IV 4.0%、因子 V 3.8%、因子 VI 2.5%、また共有分散に対しては、30.6%、22.4%、15.4%、12.2%、11.7%、7.8%となっている。

因子の解釈

因子の解釈を行うために、それぞれの因子に相対的に高く負荷する Way として、ここでは便宜的に負荷量の絶対値 .250 以上のものを抽出し、これらを表示することにした。Table 5, 7, 9, 11, 13 は、それぞれ Morris の因子名でいえば、因子 C (“*Withdrawal and Self-Sufficiency*”), D (“*Receptivity and Sympathetic Concern*”), E (“*Self-Indulgence or Sensuous Enjoyment*”), B (“*Enjoyment and Progress in Action*”), A (“*Social-Restraint and Self-Control*”) と対応する構造をもつものである。

Table 4-1. United States Rotated Factors

Way \ Factor					
	A	B	C	D	E
1	.51	-.03	-.05	.02	-.02
2	.10	-.28	.50	-.11	.20
3	.25	.01	-.05	.34	-.03
4	-.44	.12	.10	-.11	.38
5	-.04	.34	-.36	.20	.07
6	.17	.30	-.18	-.06	.02
7	-.07	-.19	.02	-.18	.20
8	-.12	.02	-.08	.09	.44
9	-.03	-.09	.26	.47	.19
10	.41	.14	.22	.09	-.25
11	-.10	-.17	.54	-.02	-.02
12	.04	.58	.00	-.01	.01
13	.07	.02	.15	.51	-.27

Note: This table is cited from Morris (1956), p. 32.

Table 4-2. India Rotated Factors

Factor Way	A'	B'	C'	D'	E'
1	.40	.01	.06	.09	.15
2	.28	-.28	.43	.12	.11
3	.14	.05	.22	.25	-.26
4	-.32	.12	.01	-.03	.58
5	-.15	.52	-.09	.23	.17
6	.19	.46	-.02	.01	-.05
7	-.11	.09	.22	-.23	-.17
8	-.25	-.02	.08	-.12	.28
9	-.02	-.24	.49	.01	-.07
10	.42	-.01	.24	.24	-.17
11	.15	-.29	.54	.02	-.18
12	.04	.52	.15	.15	.02
13	.00	-.04	.09	.52	-.07

Note: This table is cited from Morris (1956), p. 35.

Table 4-3. China Rotated Factors

Factor Way	A''	B ₁ ''	B ₂ ''	C''	E''
1	.45	-.04	-.25	-.25	.16
2	.47	-.34	-.02	.34	.02
3	.15	.43	.11	.14	-.14
4	.00	-.17	.05	.08	.42
5	-.03	.69	.01	-.21	-.01
6	-.07	.35	.45	.01	-.20
7	.15	.11	-.01	-.01	.47
8	.00	-.11	-.10	.04	.57
9	.20	-.03	-.07	.45	.28
10	.43	.16	.15	.14	-.27
11	-.01	.00	.06	.53	.05
12	.06	.07	.54	-.19	-.01
13	.26	-.02	.34	.01	-.05

Note: This table is cited from Morris (1956), p. 35.

以下では、得られた各因子について、アメリカ、インド、中国の因子との比較を行いつつ、解釈ならびに命名を行うことにする。なお、アメリカ、インド、中国の因子行列は、それぞれ Table 4-1, 4-2, 4-3 に示すとおりである。さらに、われわれの抽出した因子と他の3つの文化標本の対応する各因子それぞれの間で因子の類似度を表わすため、Wrigley & Neuhaus (1955) の公式を用いて因子間の一致度指数 (coefficient of congruence, ϕ) を算出し、これを Table 6, 8, 10, 12, 14 に示した。この指数を算出するための公式ならびにこの指数の可能範囲については、Table 6 の註に詳しくのべてあるが、要するにこの指数の見方は、相関係数の場合に準じると考えてよい。なお、この指数の適用は、2つまたはそれ以上の因子分析が、同一の変数を用い、かつ異なる標本にもとづいて実施されている場合に限られる。

まず、因子 I から見ることにしよう。

(1) 因子 I : Table 4 に示すごとく、本因子に対しては、Way 4, 11, 2, が高い正の負荷を示し、一方 Way 5, 1 は負の負荷を示す。すなわちその強調点は、瞑想、達観、享樂などを肯定し、他面では、エネルギーシユな協同活動ならびに穩健な社会的参加などの如き社会活

Table 5. Factor I (Corresponding to the Morris' Value Factor C "Withdrawal and Self-Sufficiency")

Way	4. (.553) experience festivity and solitude in alternation
11. (.517)	meditate on the inner life
2. (.484)	cultivate independence of persons and things
1. (-.406)	preserve the best that man has attained
5. (-.428)	act and enjoy life through group participation

Table 6. The Coefficients of Congruence (ϕ 's; the Measures of Degree of Factorial Similarity): Factor I $\times$ Morris' Factor C.

	US	China	India
Japan	.799	.793	.584
US		.785	.821
China			.813

Note : The present coefficient can be obtained the following formula,

$$\phi_{pq} = \frac{\sum_{j=1}^n 1a_{jp} \cdot 2a_{jq}}{\sqrt{\left(\sum_{j=1}^n 1a_{jp}^2\right) \left(\sum_{j=1}^n 2a_{jq}^2\right)}}$$

where the prefixes "1" and "2" are employed to distinguish the factor weights in the two studies; ... The a indicates factor loadings, and the p and q indicate the factors of study 1 and study 2, respectively; and the n is the number of variables upon which the factor analyses were based. The coefficient of congruence (ϕ_{pq}) can range in value from +1 for perfect agreement (or -1 for perfect inverse agreement) to zero for no agreement whatsoever. (See Harman, H. H. 1960, esp. Pp. 256-260)

動への志向性を否定する内容にある。この因子 I を、Table 4-1, 4-2, 4-3 に示す他の 3 つの文化標本の対応する因子 (C 因子) と比較すると、アメリカ、中国の因子との間にかなりの類似がみとめられたが、インドのそれとの類似度は相対的に低かった (Table 6 をみよ)。なお、Morris の 3 つの因子にともに正の負荷がみとめられた Way 9 は、この因子 I にも .224 の負荷量がみとめられたことから、この因子を Morris に準じて「隠遁と自足」の因子と命名することは妥当であると思われる。ただしこの因子には、Way 4 が正の大きな負荷を示しているが、こうしたことは、他の 3 つの場合にはいずれもみられない。従ってこれは、因子 I の、他の 3 つの文化標本の因子に対する相対的な特異性を示すものであると考えられる。Way 4 の内容に、自己志向的要素の含まれることを考えれば、Way 4 がこの因子に正の負荷を示すことは十分に了解しうるところである。おそらく、日本人の「隠遁」ということには、多分に、それを快楽とする心情が含まれているものと解される。

(2) 因子 II : この因子には、Table 7, Table 8 に示すように、Way 3, 13, 9 が正の負荷を示して、アメリカの因子 D に類似し、インドの因子とはそれほど類似していない。ただし、この因子では、Way 3 が因子の解釈に第一次的な役割を果しているのに対し、アメリカ、インドの D 因子 (中国の場合はこれに対応する因子がえられていない) では、それが副次的な

地位を占めるにすぎないという点において、ニュアンスに若干の差異がみとめられること、さらにまた、インドのD因子では Way 9 への負荷がきわめて低く、因子の解釈にはほとんど貢献しえないでいることなど、わずかながら差異がみとめられる。かくて、われわれの因子IIを、Morris に準じて、「受容と同情的関心」と命名することにする。

Table 7. Factor II (Corresponding to the Morris' Value Factor D "*Receptivity and Sympathetic Concern*")

Way	3. (.558) show sympathetic concern for others
	13. (.558) obey the cosmic purposes
	9. (.300) wait in quiet receptivity
	1. (.247) preserve the best that man has attained

Table 8. The Coefficients of Congruence: *Factor II* $\times$ *Morris' Factor D*.

	US	China	India
Japan	.810		.622
US			.702
China			

(3) 因子III: この因子には、Table 9 に示すように、Way 8, 7, 4, が正の負荷を、Way 10 が負の負荷を示しており、その強調点は、感覚的享楽や安楽と、偏らない柔軟な生活態度におかれ、他方、克己もしくは自制による禁欲的生活はこれを否定するという内容である。Table 10 で明らかなように、この因子IIIに最も近似しているものとして、中国とアメリカの因子Eがあり、やや距たりをもつものとしてインドの因子Eがある。従って、この因子IIIもまた、Morris の命名に従い、ひとまず「感覚的享楽もしくは放縦」としておこう。なお、あとの考察にあるように、負荷する Way から考えて、最終的には、本因子は「放縦」の語を省き「感覚的享楽」と命名することとした、

Table 9. Factor III (Corresponding to the Morris' Value Factor E "*Self-Indulgence or Sensuous Enjoyment*")

Way	8. (.385) live with wholesome, carefree enjoyment
	7. (.346) integrate action, enjoyment, and contemplation
	4. (.275) experience festivity and solitude in alternation
	10. (-.410) control the self stoically

Table 10. The Coefficients of Congruence: *Factor III* $\times$ *Morris' Factor E*.

	US	China	India
Japan	.700	.711	.501
US		.843	.640
China			.513

(4) 因子IV: Table 11 に示すように、この因子には、Way 5, 6, 12 が正の負荷を示している点において、アメリカとインドの因子Bと類似しており、また中国の因子B₁とB₂に対し

ては、それぞれ部分的に似通った点をふくんでいる。(Table 12 で明らかなように、この2つの中国因子のうちB₂に対する類似度は著しく低い。) また、アメリカ、インド、中国のB因子に共通して観察される Way 2 による負の負荷は、この因子IVではみとめられなかった。こうした多少の差異がみられるとはいえ、それらは無視しうるものと考えられるので、Morris に準じてこの因子を「活動の中での享楽と進歩」と命名しておく。

Table 11. Factor IV (Corresponding to the Morris' Value Factor B "Enjoyment and Progress in Action")

Way	5. (.391) act and enjoy life through group participation
	6. (.364) constantly master changing condition
	12. (.279) chance adventuresome deeds

Table 12. The Coefficients of Congruence: Factor IV $\times$ Morris' Factor B.

	US	China-1	China-2	India
Japan	.749	.612	.434	.847
US		.546	.682	.758
China-1			.287	.675
China-2				.602

(5) 因子V: Table 13 に示すように、Way 2, 1, 9 が正の負荷を、Way 12 が負の負荷をそれぞれ示している。すなわち、それらの生き方が強調するところは、達観と自足、過激を排した中庸的立場からの社会的参加、ならびに受容的な生活態度にあり、一方冒険的、活動的な生き方はこれを否定するという内容である。次に、この因子Vを、Morris の3つの文化標本

Table 13. Factor V (Corresponding to the Morris' Value Factor A "Social-Restraint and Self-Control")

Way	2. (.384) cultivate independence of persons and things
	9. (.261) wait in quiet receptivity
	1. (.236) preserve the best that man has attained
	12. (-.253) chance adventuresome deeds

Table 14. The Coefficients of Congruence: Factor V $\times$ Morris' Factor A.

	US	China	India
Japan	-.013	.394	.145
US		.565	.832
China			.666

からえられたA因子と比較してみると、いずれに対してもあまり似ているとはいえない。強いていえば、因子Vは中国のA因子に相対的に最も近似しており、インドの因子Aがそれにつき、アメリカの因子Aとの類似はほとんどみられない($\phi = -.013$)。このように他の三国の因子に対する類似度が低かった理由としては、アメリカ、インド、中国の因子Aに共通してみられた Way 10 の正の負荷が、われわれの因子Vにはみとめられず、それに代るものとして、Way 9 への正の負荷がみられたということがあげられよう。従って、因子Vは、3つの文化標本に見られ

たような、克己し自制して社会的拘束に身をゆだねるという、いわゆる主体的、積極的な生き方ではなく、むしろ、社会的拘束を受身的に受容する生き方の次元であろうと解される。

これらの考察から、この因子Vは、「社会的拘束と黙従」と命名し、さきの三国の因子（「社会的拘束と自己統制」）から、いくらか変異した因子であることを強調することにした。

(6) おわりに、Table 3 の因子VIについてのべることにする。この因子は、Way 3, 4 がそれぞれ負の負荷を示しているのみで、因子の解釈に積極的に寄与する^{プラス}+.250以上の負荷量をもつ項目を欠如している。従って、ここでは、寄与率が2.5%という低さであることをも考慮し、これを残差因子とみなし、解釈ならびに命名は行わないことにした。

考 察

1. 結果の項でみたように、今回われわれが析出した因子は、因子Vを除けばいずれも Morris の行った分析結果とかなりの類似、もしくは対応がみとめられた。このことは、それぞれの文化標本相互間で「生き方」尺度への好悪または選好が、著しく相違している (Morris, 1956; Misumi & Ando, 1964) にもかかわらず、回答者たちは共通の価値次元 (common value dimensions)、もしくは共通の潜在的価値構造 (a common underlying value structure) に準拠して、Way の評定を行っているということを意味している。ただし、われわれの因子Vや Prothro (1958) の抽出したアラブ独自の2つの因子などを考慮に入れば、この価値構造の共通性 (普遍性) には若干の限定を付する必要があるかもしれない。

2. ところで、今回の研究結果を含む4つの文化標本からえられた因子を相互に比較してみると、そこには多少の、もしくは一部にはかなりのバリエーションが見いだされる。これらのバリエーションは、おそらく文化差を意味していると考えられるので、次にこの点の考察をすすめることにしよう。

(1) ふたたび Table 4-1, 4-2, 4-3, Table 5 をみると、アメリカ、インド、中国のC因子には、いずれも Way 11, 2 ならびに9が高い正の負荷を示しているのに対し、日本の因子Iには Way 9 の負荷量が大きくなく、その代りに Way 4 が高く負荷している。このことから、われわれの因子Iの特異性は、他の3つの文化標本のそれと比べ、どちらかといえば、享楽への傾斜がつよいことにあるといえそうである。したがって、因子Iの特異性を多少強調してのべれば、消極的な「隠遁と自足」というよりも、積極的に享楽を求め、それを充足させようとする傾向が比較的強く、多分に自己中心的な享楽追求と関心の自己への閉塞とでもよぶべき内容であると解される。なお、Table 6 をみると、インド以外の2つの因子とはかなりよく似ていることがわかる。

(2) 次に、Table 4-1, 4-2, 4-3, ならびに7によって、因子IIと因子Dについて考察を試みる。この因子はアメリカの因子Dに著しく類似しているが、インドの因子Dに対しては、若干の差異が目立つ。(Table 4-3 で明らかなように、中国学生についてはこの因子Dに対応する因子がえられていない)

(3) Table 4-1, 4-2, 4-3 ならびに Table 9 において、因子IIIとEを比較してみると、Way 8 と4が正の負荷を示す点は、他の3国の因子Eに近似しており、さらに、Way 7 が正の負荷を示している点は、中国の因子Eと似ている。さらにまた、負の負荷をもつWayをも考慮に入れば、全体的に中国の因子Eにもっとも似通った関係にあることがわかる。

これら、日本と中国の因子の特色を、とくにアメリカのそれと対比して考察するならば、前二者の因子にみられる快楽追求は、後者のアメリカの場合に比して、耽溺や放縦というよりも、むしろ相対化された節度あるものであるように思われる。従って、Morris が用いた「感覚的享楽もしくは放縦」という因子の命名は、日本と中国の場合には、やや適切でないきらいがある。従ってわれわれは、放縦 (Self-indulgence) の語をはぶき「感覚的享楽」と名づけることにした。

(4) Table 4-1, 4-2, 4-3, ならびに Table 11 をみると、因子IVはアメリカ、インドの因子Bには顕著な類似がみられている。したがって、やや特殊な内容をもつ中国の因子B₁とB₂に対して差異がみられたことを除けば、Way 12 が副次的な負荷を示すという点において、アメリカ、インドのB因子に比べ多少のニュアンスの相違があることを指摘しうるに止まる。なお、4つの文化標本の因子Bのうち、中国の因子B₂は、B₁や日本の因子IVとも比較的に類似度が低いことがわかる。

(5) 最後に、Table 4-1, 4-2, 4-3 ならびに Table 13, 14 によって、因子Vをみてみよう。この因子には Way 2 が正の負荷を示しているという点で、どちらかといえば、部分的にインドの因子A、中国の因子Aと似ており、Way 10 への正の負荷がみとめられなかった点では、アメリカ、インド、中国のいずれとも異っている。このことは、日本人の対社会的態度が、消極であることを示唆しているように思われる。すなわち、アメリカの因子Aにおけるような、Way 3 の正の負荷は、「他者への愛や同情」というヒューマニスティックな要素が重要な契機をなしていることを示唆するものであり、そのため Way 10 で表わされる「克己や自制」も行われ、どちらかといえば、すぐれて社会性に富む在り方を内包していると解されるのに対し、日本（中国、インドもまた）のそれは、むしろ、達観と自足 (Way 2) などの、どちらかといえば自己志向的、個人主義的な要素が契機となり（中国の因子Aでは Way 13 が Way 3 に代る役割を果たしていると考えられるが）、さらに、日本の因子Vにおいては、Way 10(克己)を欠き、受動的、順応的な内容となっている。（この点インド、中国のA因子とも異なる）

Table 15. Comparison of the Obtained Factors with Morris' Ones

Present Study			Morris' Study	
Factor	I "Withdrawal and Self-Sufficiency"	←—→	Factor	C "Withdrawal and Self-Sufficiency"
	II "Receptivity and Sympathetic Concern"	←—→		D "Receptivity and Sympathetic Concern"
	III "Sensuous Enjoyment"	←.....→		E "Sensuous Enjoyment or Self-Indulgence"
	IV "Enjoyment and Progress in Action"	←—→		B "Enjoyment and Progress in Action"
	V "Social Restraint and Acquiescence"	←.....→		A "Social Restraint and Self Control"

Note: Straight lines indicate that two given factors are *extremely similar* and dotted lines *similar to some extent*.

従って、アメリカのA因子が積極的な社会性因子であるとすれば、日本のV因子は、受動的・消極的な社会性因子であるとして特徴づけることが許されるであろう。（インド、中国の因子Aもまた、アメリカの因子Aと似ている）これらのことが、因子Vを Morris のA因子「社会

的拘束と克己」と対応させつつも、あえて「社会的拘束と黙従」と名づけた理由である。

われわれは、以上の分析から得られた五つの価値因子を、Morris の3つの文化標本の各因子群と対比させつつ、日本学生の価値因子の相対的特色について述べてきた。しかしながら、日本学生の因子にこうした若干の特色（特殊性）がみとめられたとはいえ、それらがすぐに、「生き方」尺度にはたらくと思われる共通次元の存在を否定することにつながるわけではない。結果の分析の項でも述べたように、多少の変動がみられたにもかかわらず、各標本間にみられる因子構造の類似性は、より印象深いものであった。従って、文化を超えた共通の価値次元の存在を主張している Morris の所説は、あながち不当ではないように思われるのである。かくて、Morris の5つの因子と、われわれが析出した5つの因子との関連を Table 15 のように示すこととした。この場合、実線は、それで結ばれた両因子が極めてよく一致していることを示し、また破線は、部分的に差異が認められてはいるものの、十分に対応づけの可能なものであることを示している。

3. 次に、研究目的の第3に掲げた Way 7 の考察に移ることとする。まず、Way 7 を、ここでことさら問題とするにいたった理由についてのべる。Way 7 は、Morris (1956) のアメリカ学生、ならびにわれわれが前研究 (1964) で報告した日本学生の標本 (1964年現在) において、ともに最も好意的な反応を受けた「生き方」であった。

ところでこの Way 7 は、Morris によれば、かれの言う基本的価値の三要素たるディオニゾス要因（享楽を求めての活動）、プロメテウス要因（外界の支配と変革のための活動）ならびに、ブツダ要因（欲望を規制し、心の平安を求める）のいずれか一つだけに偏ることのない、「それらをダイナミックに統合した生き方」とみなされているものであり、「“Maitreya”の思想」と命名された生き方である。“Maitreya”とは、弥勒菩薩のサンスクリット名で、インド思想史上、将来地上に出現し、釈尊に代って一切衆生を救う仏であり、友愛にみちた賢人であるとされている。つまり Morris としては、これまで地上に現われたことのない新しい寛容宥和の生き方を、この Way 7 に盛りこもうと意図したことになる。(中村, 1960, Pp. 178-199)

従って、われわれは日本学生においてみられた、Way 3（他者への愛情と共感・自己抑制）への選択の減少（17.7%→3.7%）と Way 7 への選択の増大（8.8%→26.7%）によって明示された、その15年間（1949年～1964年）のわが国学生の「生き方」の変化を、よりよい「生き方」へ志向するものであると、積極的、肯定的に考察したのであった。(安藤・三隅, 1965)

然るに、これと対照的な考察が石井 (1965) によってなされた。すなわち、石井によれば、この Way 7 への選好は、「その場その場にうまく適合して生きぬくという、便宜主義の生き方であり、Morris が考えるような『人道的・理想主義的〔生き方〕』とは、およそ縁遠い現実的で実用的な人生観と言うことができ〔る〕」と評している。

他方、1960年代に発表されたわが国の一般青少年に対する生活意識調査の結果をみても、たとえば梁井 (1961) の研究では、わが国の現代青年は「…人生に対して夢や希望が少くなり、生活態度も積極的なものが少く、…個人〔主義〕的な態度〔や〕…平凡な安定した生活を理想とする」傾向が顕著であると考察しているし、さらに統計数理研究所の「日本人の国民性」(1961. Pp. 127—129) に関する調査報告でも、日本青年が戦前に比べて、より個人主義的、非社会的であり、安楽もしくは享楽の追求に志向する傾向が著しく増大したとのべている。こ

これらの諸研究は、もとより大学生のみを対象としたものではないけれども、それらの資料が、同時代の大学生の傾向を示唆していると考えすることは、あながち不当ではなからう。もしそのように考えることが許されるならば、これらの研究結果から、現代日本の青少年が、Morrisの言うような理想的な“Maitreya”の道を志向していることを示す積極的な証拠など、どこにも見いだすことができないといわねばならない。

このように、同一の資料をめぐる、相対立する解釈と意味づけがなされたり、他の諸研究の結果を吟味したりするなかで、われわれは、Way 7 への選好が果してわが国の青少年たちの如何なる心情を反映するのであるかという問題に対して、より組織的な考察をすすめるよう動機づけられることとなった。

そこで、まず Table 2 の相関行列で、Way 7 に相対的に高く相関するものをみると、Way 8 (強烈な刺激をきらい平穏のなかで快楽を追求する生き方; $r=.163^*$) と、Way 13 (人のため、世のため、宇宙的目的のために献身; $r=.151$) がある。しかし、この程度の相関の値では、Way 8 や Way 13 から Way 7 の意味内容を吟味することはむずかしい。そこで藤田ら (1963) による国際基督教大学学生ならびにその(両)親に関する調査報告から、上と同じように Way 7 に相対的に高く相関する Way を拾ってみると、1961 年度新入学生の資料では、Way 4 ($r=.214$) と Way 8 ($r=.130$)、1962 年度の新入学生の場合も、同じく Way 4 ($r=.183$) と Way 8 ($r=.182$)、(両)親の資料では Way 4 への相関は低く ($r=.073$)、Way 8 には相対的に高い値 ($r=.292$) がみとめられた。これらの結果から、わが国の学生や一般の成人においては、Way 7 は、Way 8 に対して相対的に高い相関が一貫してみとめられているといつてよいことがわかる。アメリカとインドの資料 (Morris & Jones, 1955) においては、Way 7 が他のいかなる Way にも 0 に近い相関の値 (すなわち相関がないこと) を示していたのと、これは対照的である。(ただし、中国の相関行列は示されていないので参照することができなかった)

こうした事情は、因子構造にも反映されている。すなわち、Table 3 の回転後の因子行列で明らかなように、Way 7 は、因子Ⅲに .346 の負荷量を示し、Way 8 とならんでこの因子の解釈に積極的に寄与している。これと対照的に、Table 4-1 と Table 4-2 のアメリカ、インドの因子行列では、Way 7 は、どの因子にも有意な負荷がみとめられない。(但し、Table 4-3 の中国の場合は、E 因子に対して Way 7 が .47、Way 8 が .57 といずれも高く負荷していて、われわれの因子行列と酷似している)

以上の分析ならびに考察の結果、われわれは、日本学生の Way 7 への選択を、Morris にならって「理想的生き方」への志向であると断定することには、ちゅうちょをおぼえざるをえなくなった。すなわち、わが国の学生の Way 7 への選好には、Morris がアプリオリに設定した「多元統合的な柔軟な生き方」だけでなく、どこか無難な状況のなかにあつて享楽を追求するといった心情も含まれているように思われる。これは、石井 (1965) の主張を側面的に支持する結果であるといわなければならない。なお、Way 7 が、日本、中国の学生とアメリカ、

* ピアソンの r の有意性の検定には、 $CR = \sqrt{\frac{r}{1-n}}$ (岩原, 1957, p.372) の公式を用いた。 $r=.163$ なら

びに $r=.151$ は、いずれも両側検定の場合 $p<0.1$ で有意である。

インドの学生との間で、異なる反応をえているのは何故であるかは、興味ある問題であるが、客観的な資料にもとづいて、直接これを検討することは、ここでは不可能である。おそらく、尺度の翻訳過程に必然的に生じる、意味論的・文化的バイアスによるものか、あるいは、中国と日本の資料にかなりの類似がみられていることに鑑み、両国文化に共通する、ある固有の傾向があって、それが何らかの形でこの Way 7 への反応に寄与しているのかのいずれかであろう。あるいは、その両要因が交絡しつつはたらいっているとも考えられる。

要 約

1. 本研究には、3つの目的がある。すなわち、(1) まず日本学生の資料による Morris の「生き方」尺度 (Table 1 に示す) の因子分析について報告すること。(2) 次にその結果と、すでに Morris 自身によって報告されているアメリカ、インド、中国の因子との間で交差文化的に比較すること、(3) 最後に、付加的に、Way 7 に対する日本学生の選好が、何を意味しているかについて、今回手持ちの資料の範囲内で吟味を行うこと、がそれである。

2. 1964年度九州大学新入学生1,366名の資料(母集団)から無作為に400名の大きさをもつ男子標本を抽出し、13個の Way 相互間で、積率相関係数の行列 (Table 2) を求め、それに重因子分析法を実施し、6個のセントロイド因子をえることができた (Table 3-1)。さらに、単純構造を求めて直交回転を行ない、解釈可能な5個の因子と1個の残差因子を見いだすことができた (Table 3-2)。

3. 結果の主なもの次は次のとおりである。

(1) Table 2 で明らかなように、相関係数の値は最高が $r=.334$ であり、一般に低いことが目立つ。これは、各 Way が相互に独立の内容を指示しているためであろうと解釈された。

(2) Table 3 に示すように、各因子の寄与率は概して高くない。このことは、いずれか特定の因子を以って、価値観の大部分の領域を代表させることができないことを示唆している。換言すれば、すべての因子が、いずれも価値観を構成する重要な次元であることを意味している。

(3) 回転後の因子 (Table 3-2, 5, 7, 9, 11, 13) と Morris の因子行列 (アメリカ, Table 4-1; インド, Table 4-2; 中国, Table 4-3) とを対比しつつ、因子の解釈ならびに命名を行った。この日本、アメリカ、インド、中国の因子相互の類似度をみるために、Wrigley & Neuhaus (1955) の因子間一致度指数 (coefficient of congruence; ϕ) を用いた。(Table 6, 8, 10, 12, 14) 分析の結果について、次のようなことが考察された。すなわち、われわれが今回抽出した日本学生の第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ、第Ⅳ、第Ⅴ因子は、それぞれ、Morris の因子C (“*Withdrawal and Self-Sufficiency*”), D (“*Receptivity and Sympathetic Concern*”), E (“*Sensuous Enjoyment or Self-Indulgence*”), B (“*Enjoyment and Progress in Action*”), A (“*Social Restraint and Self-Control*”) と対応するものであると考察された。従って、Morris が、価値次元には文化を超えた共通性が存在すると主張しているところは、今回の資料でも支持されているといってよいであろう。但し、因子Ⅲと因子E、因子Vと因子Aの2つの対(つ)のそれぞれにみられた類似度は、他の3つの対の場合に比して、相対的に低かったことから、われわれは因子Ⅲを「感覚的享楽」、因子Vを「社会的拘束と黙従」とそれぞれ命名し、日本学生の価値次元の相対的な独自性を強調することとした (Table 15)。

(4) Way 7 に対する日本学生の選好が何を意味するかについて、Table 2, ならびに 藤田

ら (1963) による 国際基督教大学の学生標本からの 相関係数にもとづき 考察を行った結果, Way 7 は一貫して Way 8 に対し, 有意な相関がみとめられた。(Table 2 では, $r=.163$, $p<.01$ で有意) これは, Morris のアメリカ, インドの資料において Way 7 が他の Way とほとんど無相関であったのと対照的であった。従って, わが国の学生の Way 7 に対する選好は, アメリカ, インドの場合に比べれば, 「無難な状況のなかにあつて享楽を追求する」という生き方 (Way 8) への傾斜を含んでいると解釈された。

謝 辞

本研究の因子分析に用いた資料は, 「大学生とその生活環境に関する 社会心理学的研究」グループ (代表者は, 教育学部三隅二不二教授) によって収集されたものであることを明記し, 三隅教授ならびに同グループのメンバーに, 謝意を表する。また, 因子の類似度の指標として Wrigley & Neuhaus の ϕ 指数を用いるように示唆してくださった金沢大学教育学部小嶋秀夫助教授に厚く感謝したい。

文 献

- 安藤延男・三隅二不二 わが国大学生の生き方 (価値観) における時代的変容 (戦後と現在と), 教育と医学, 1965, 13(9), 814-817.
- 安藤延男・三隅二不二 学生の価値観の分析: Morris 尺度の第7の「生き方」の内包的意味について, 日本グループダイナミクス学会第15回大会発表, 1967. (「集団と行動」1967, No. 7.)
- 安藤延男・三隅二不二 学生の価値観に関する研究: Morris 尺度の因子分析, 日本社会心理学会第8回大会報告, 1968. (「年報社会心理学」第9巻.)
- Edwards, A. L. & L. L. Thurstone An internal consistency check for scale values determined by the method of successive intervals, *Psychometrika*, 1952, 17, 169-180.
- 藤田恵壘 個人的コミュニケーションによる.
- 石井次郎 世界観について: 大学生の人生観の分析, 教育と医学, 1965, 13 (10), 884-889.
- 岩原信九郎 教育と心理のための推計学, 日本文化科学社, 1957.
- Misumi, J. & N. Ando A cross-cultural and dia-chronical study on Japanese college students' responses to the Morris' value scale, *Psychologia*, 7, 175-184.
- Morris, C. & L. V. Jones Value scales and dimensions, *Journal of abnormal and social Psychology*, 1955, 51. 523-535.
- Morris, C. *Varieties of human value*, Chicago: Univ. of Chicago Press, 1956.
- 中村元 比較思想論, 岩波書店, 1960.
- Prothro, E. T. Arab students' choices of ways to live, *Journal of social Psychology*, 1958, 47, 3-7.
- 統計数理研究所国民性調査委員会編 日本人の国民性, 至誠堂, 1961.
- Wrigley, C. & J. O. Neuhaus The matching of two sets of factors, *Contract Memorandum Report*, A-32, Urbana, Illinois: Univ. of Illinois, 1955, pp. 13. (Harman, H. H. *Modern Factor Analysis*, chap. 12, esp. pp. 256-260)
- 梁井迪子 時代による青年の態度形成の変化, 教育社会心理学研究, 1961, 2(1), 25-34.

Value dimensions in Japanese college students: A cross-cultural study based on the "Ways to Live" Scale.

Nobuo Ando

The main purposes of this study are to analyse the value structure on the basis of Japanese students' responses to Morris' value scale of *Ways to Live* shown in Table 1, and to compare the obtained factors with the US, Indian and Chinese data reported by Morris & Jones (1955) and Morris (1956).

The centroid factor analysis was made on the basis of intercorrelations of the thirteen *Ways* revealed in Table 2 for four hundred male students accepted as freshmen by Kyushu University for the academic year of 1964. As a result of the factor analysis were given six centroid factors as shown in Table 3-1, and then through the orthogonal rotations of the axes made in order to arrive at a simple structure were obtained five interpretable factors and one residual one, as shown in Tables 3-2, 5, 7, 9, 11 and 13.

Then the obtained factors were compared with Morris' ones (Tables 4-1, 4-2 and 4-3) by using the *coefficients of congruence* (φ), which are formulated by Wrigley & Neuhaus (1955), as shown in Tables 6, 8, 10, 12 and 14. Through the comparison it becomes evident that, as revealed in Table 15, the obtained factors I, II and IV are extremely similar to Morris' factors C, D and B, respectively; on the other hand, the factors III and V are similar to some extent to Morris' factors E and A, respectively. The above results prove to be consistent with Morris' hypothesis concerning the "common underlying value structure."

In addition, an intensive discussion was made in order to clarify the signification of the *Way* 7 preference which was observed modally among the Japanese sample.